

911.3

7

葉集

自序

代かく小田抄けし先を利
子苗しる日乃ぬのおとま
田のそよくあーそを乃
香のさるくくと初する歌の
里ぐきさるなとそをのあひ
ふくまふ人の年母を此
一事はほひくくくくハナ
近くなりそふ生涯のそを
中あひくくくくくくく

作りたまはむきを結ぶや
ひをの詠ふとふりんとそなり
計り

後田舎

文化七庚午仲秋 弦六

枕七次四下一

歌仙行

身も心の横るいなりとふの香
葉の毛も新しき秋のかさ

隅

新しき葉の毛も新しき秋のかさ
とりとふもさる秋のいろ

菴僧のそぞろ八月の袖めなり

あうきさけりハかさこふはと

松風の便りのめくさるうら

い川やそそくる小舟は必し

山寺此處の宿基よりち眠り

白図

駒六

士朗

ト

六

朗

ト

六

朗

ぬりあうれハ麻の花出る
板ほるちを折く離れ
足ふむやとの意をするし
八月八月をききてもほめを
峰よきおく水のいふま
ききくす花の前の袖をおひ
あむすふくか茂るまき
ふ一結わお一結半をひき連
綴のみやうなま氣をりり
温泉會の種つく人ち何
儼のあうれを居風呂へとも

ト 六 朗 岳 六 朗 六 朗 六 朗 六 朗

四十二の年又吉夜をみて
山平く起す報りり 唱
筍の庭の外より先へ出る
とちなす漆りりこす不整
世の中もまた老つれど
かゝふむせる志何うあり
いつのるよ月小夜たるむ
三笠の里へ麻咲りや
あゝ酒先をとり来よ
そきこころのたよりをり
梅うきハ風の吹きも

朗 格 六 朗 六 朗 六 朗 六 朗 六 朗

唐のねくは厚お戸りて
夕暮ハ興の中も唱かを付
叶の年をををるる如月
むらゝる花の根ねふ根と婆
語もくくすもねとやる

六 朗 六 朗

白圖 四 騏六十二
士朗 三 岳輅 八

冬之部

雪のやもく曉の雪の松
はる化るるよあのを
のふふふふ毛衣の襟ハ良
うううううう出たはハ
出来たりとる
むうううううなりぬ

曉臺

批七下四下三

曙やあゝハ雪ふ煙もれ
きのふふふふふふあ
枯草や唐の主ハ白髪あ

士朗
岳輅
鹿野

松尾花 赤穂のまゝ
かきし 芦を茶と焚き 雪の目も
袖の雪の小笠は 雪はハ吹く
松葉や 雪おろく 山の 落月を 夜
夢 雪をくまき 雲金の 雪の雪
雪の雪の 雪の雪の 雪の雪の 雪の雪の
風や 雪の雪の 雪の雪の 雪の雪の

騏六 槎雀 大蕪 騏上 苔明 吐山 黃山

一日魚店は折々蕉翁塩鯛の
吟をおもひて

木やうーや草の葉又色む暗の肺
風の吹たうもけり隅田川

駢六
雀人

枕七初四下四

さうさうと佛を包む山のうへ
雲霞の仙よさうさうれうか
さうさうや人形のり佛の中
——さうさう——よき日和う南
茶の花や下流き寄戸の烟
是事との朝あけもさうさうのこ
う虎の雪ひさき中人も来に
天地のよきものくれぬ虎の雪
雪より声なりき虎のまなり
青鷺なくや時辰の先けり

橘良 斗石 葛井 馱六 梅間 馱六 木天 竹有 桂五 盧川 士朗

駝 湖 阿
六 風 城

物七
四
五

騏六 元美 騏上 大阜

駢六

士朗

石の香うところちとの里あふれ
 的場を越えよさけとり
 曙の毛櫛やうをるらん
 あうつうく流れぬより
 訪ふは又留まると暮るるも
 面の香匂を傘より書
 面白う伊勢の料理を取置
 ふ所の休みのをてぬ山る
 むく雀をのりき顔は啼つる
 新衣を穿てよその沙汰する
 名月をみればくさくさ其屋新

芳華あらしに沖田の角力取
 者の民をそとて是ら又造り捨
 人のそれとる花の事をほめる
 案一さを重く書を著しけり
 離の居跡はぬくもね風
 おそくこの名はけり
 涙は清き新の歌さ
 ら世休の母の聲を又聴く
 琴のひびきとよの雪降
 きてとけ浪の花表にけり
 浪あやもる苔のさびし

けふふとく危ふつてあるくなり
 とのを答ふする人ふまゝとら
 星をうつす水はまゝの所き松の風
 さふきもせぬ瀬つやの月
 魔つきてふとまゝととや口く
 渡る金の種うみするまゝきく
 八重の津を渡るまゝの猫の鈴
 雲のほを渡るまゝの川
 帰す水の水を一抄視るうそ
 むつゝわつきはまゝの雲
 雲の花の雲をまゝの雲を渡るなり

格 央 朗 六 有 格 央 朗 六 阜 格

沙路をうる鳳ゆきれそめ

有

騏六七 士朗 六 卧央 六
 五雄二 竹有 六 方明 二
 大阜三 岳輅 四

秋之部

西の月歩りて花は人も花は

竹有

さくの花を無たうぬ神の瀧くはき
光一時のわくハ麻の唱死ん
横雲の杉山鳴る麻のこ 名
そのふやふとハ何を唱小麻
風さくくををわく山の麻の考
詠うてハ風のわくる 板 小南
人さくくはなき事すくくはの月
あくくハつあくくはの月
花すくくはの朝夕ハくくく
秋すくくはの朝夕ハくくく
晴晴のきくくはのまきく

麥阿 秋丸 墨山 硯静 駝六 五雄 帶梅 駝六 竹趣 士朗 梅洲

さくの花を無たうぬ神の瀧くはき
光一時のわくハ麻の唱死ん
横雲の杉山鳴る麻のこ 名
そのふやふとハ何を唱小麻
風さくくををわく山の麻の考
詠うてハ風のわくる 板 小南
人さくくはなき事すくくはの月
あくくハつあくくはの月
花すくくはの朝夕ハくくく
秋すくくはの朝夕ハくくく
晴晴のきくくはのまきく

葛齋 野秀 鹿野 駝上 彭翔 烏丸 徐英

勢州菩提山萱堂三夜三日参籠之時

さくの花を無たうぬ神の瀧くはき
光一時のわくハ麻の唱死ん
横雲の杉山鳴る麻のこ 名
そのふやふとハ何を唱小麻
風さくくををわく山の麻の考
詠うてハ風のわくる 板 小南
人さくくはなき事すくくはの月
あくくハつあくくはの月
花すくくはの朝夕ハくくく
秋すくくはの朝夕ハくくく
晴晴のきくくはのまきく

駝六 卓老 岳輅

明月ハ何處ニ有リト云テもつゝ

桂五

病後

そあつても月ひとりつゝ歩み

駢六

上癮は修せられゝ郊外に

月を足て夜ハ夢をなえり

えうりあり

月丸くあつて清光をそよの

美う代りて砂の粒よりあつ

射道

秋の夜ハ只の燈よりあつて

由肆

秋の葉の足事よりあつて

卧央

月の出を望みて居るすゝき

珉屋

九月至日竹生暗よりつゝ

風のうゝあゝとて日の暮る

月空陰より宿る湖面月う

りて雞犬人語の音を聴す

自塵を吐きたるあつて地

湖を抱ふあつて竹生

駢六

いふ夢あつて果て落来る

兆雲

目をこゝかす時稲妻の

駢六

あつて秋の月を望み

素剛

蘇山は登る事五十年

今逢ぬ月の末に岳の像を

終りなりて

みすせの村や仙のつ方をちき

駿六

あふくもあふく三岳の月

大阜

石海も蒼海系又風経く

五雄

夏之部

衣ぬれはちきもすゝ衣衣

桂五

くふくを父のそのきん衣衣

士朗

おやうくいふ小儀なりくあもく

駿六

雲と見く花の根枝を枝きり

而后

陳轍を臺も蚊登りる家もき

少汝

手れくく所もきて来てなり

尼
閑樹

極るすく松のこも夕すくみ

浦且

夕良やかきうなりたる油梧

九岳

夕良の毫のあきり此料理

駿六

時鳥一枕の榮を授やき

大阜

すくきす唱ぬうちう月暮

木容

月をけりて廻りこのや時暮

駿六

すくき吳越のあきりけあきり

竹有

吹くつてけりく唱やむ陳轍

岳格

まきする是のあきりけのむ

田江

牡丹咲く俄又のむを起り

松呂

し掃くくすくく月のをき

鹿野

さうさふおとす日さかり苔の花
夏の日の暮るをすくぬ月夜ふ
夏の月思ふぬこよ明よりり
夏の月歩るもいるも林葉うか
山は寐て起きたるもやま嵐
水鶏鳴泣をとひる細江に
鳥鶏鳴ゆふふさぬう葉相葉
夕まや湖の水引かこき
夕まの果おもろや水のうへ
簾や夕明ハをうけう背をさるぬ
隣りう灯うつる若葉ふうか

駒六 米汁 駕風 五雄 樗間 松菊 駒六 昆明 也人 萬中 駒上

夏虫よさいつてをいふ声は
夏の蚊の手の柄をとすりうら

春之部

梅の花たきき玉の唄うれ
山里ハせえきこのや梅の花
夕梅蛙とてて鳴をくりり
きのふえり梅ハ花の木の末のるふ
ハ重葉忘れれる宿もゆりり
花毎にふれもあがりハ重梅
春風の井は新さす雀う南
さされまをさす雀う雀う

東西 駒六 岳路 駒六 大阜 黄山 圃曉 梅間 徐英 金谷

うらぐと出てけりては阿比も竜
花にうなるものときて出る山家
花をえんよある人もる山家
大寺もかういふやう花のそれ
静さをもををえり梅の花の春
そのことすきとて面白なるの風
春の風廻つりあるうか
春風やそりれ出る田螺かに
やふへい山家もするよ春の風
よふよの良むつりや春の風
きとんよりき人の姿や藤月

永齊

少汝

駿六

方明

駿六

竹有

茂竜

茂東

月底

李基

五道

教寺や海士の上る涅槃像
山寺や入佛供事は帰る
来嵐ハ松のうさよ唱りす
静う川東も出たり種衣

士朗

南巢

沙鷗

有磯

入唐讃

初機さんくハ流る山色哉

駿六

何某新婚の賀よ

春の目おつり金もよ露と非
雪の白くや教はる西のおと
雪ふ小二日あつて八日あつて

、

竹堂

大商

荒海や大うへに赤きまの魚
りまを難波の草は見えたり

桂五
彫蕪

諸國四季部

梅咲や春くふへる物事の穴

椿堂

空き日のあはれをさけの梅

駿六

又くき旅の姿やまの面

卓池

二日降るま中ぬのあつち

駿六

二月やうへくまわりの衣

大津
駿道

色のおもふ衣を二月の嵐に

駿六

又ひとつや田螺の蓋を照らす

春一
一州

梅柳まの国鼻と見えたり

筆
果居

梅柳まの国鼻と見えたり

駿六

花のまの似たりをまの時の

京
其成

うへうへとまの似たりをまの時の

駿六

あすはまの似たりをまの時の

七
雀鳴

二日月は序羽りややとまの

駿六

との花のまの似たりをまの時の

大坂
長齊

花は水はまの似たりをまの時の

駿六

月の出て日を映すのまの時の

琴
于當

よく見えたりやとまの時の

駿六

その聲は流れやとまの時の

進
龍山

七夕の果は稲妻はなりたり

駿六

秀房を住よりかりり其の月

岩苔

夜の月急ななきあそいけれ

大坂 駿六

ちとのつちも其の情すき守ふの歌

大坂 米彦

月よ嘆毛あそなくは杉のふけ

駿六

そやくと極まりきり田一枚

江戸 三孝

田を極まりふい瀬つすうこちい

駿六

予ともふり目そく穴はる清水を

イセ 曉浦

可き事も素せて出たるを特筆

駿六

ある物のすきそ其のまゝ面を

大坂 瑞馬

炭竈のうへは消りり其のすき

駿六

解き方や賛あつたなる飯の

方 柳莊

略唱より船の夕のこきふり

駿六

椎のまれの急き形や後の月

大坂 砂文

あそりふまゝに家根のよきその月

駿六

二見の浦よ

名月の出汐や沖のそよきあち

ミ 千阿

月のみは強よ言や二見の

駿六

き星のあうきふくをうりたり

甲州 可都里

栗殿の森よ

森のこゑや星の二帯もあつらん

駿六

丁もろ松のうへをかすこころ

大坂 升六

いつゆるともなく居る帰るり

駿六

さつ雪の毎日降や諏訪の湖

竹齋

赤膚の雪や二北家尾張富士

駿六

淡雪は雪を妻呼うすうも

歩 緩貢

赤膚は雪を歩む鳥うれ

駿六

人呼う時を呼う雪うれ

桃林

雪晴く雪を呼う雪うれ

駿六

入やすき月ハ赤膚は雪うれ

戸 成美

朔風や雪うれ山ノ形

駿六

引雪を雪うれ山ノ形

白 柳堂

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

下 大節

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

語 漢

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

五 来

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

駿六

雪は雪うれ山ノ形

駿六

常ふ梅をき宿のすきやき

魯隱

三きりやと常きぬ三きり

駿六

蟬牛一きりハ水の隙をゆく

琴州

蟬幅や芥きりりト河系

駿六

出羽の月らん山とふふ若りて

涼風の生れ雨の月の山

近江

雲ハる孫るえりり常の月

駿六

よやせハるふふ花を花の宿

京大左

花さうり今争競る人の教

平松

さうり嘆山あより峰さるい竜

駿六

えややあすハ端へき山さうり

京六書

秋風さうりひらけ一日り

駿六

秋系や芒をすする青の面

土卯

三日月の葉さす光りり

駿六

常のきねは濡る小るりれ

大坂

頁しき日を撫やする其の風

駿六

鹿鳴や鹿る事も旅のやと

仙風

旅人ハ系ひとりし鹿のきり

駿六

さふくしと小川を渡る四月か

青森

常山詠小帰る四月うる

駿六

秋の世は歳取るもゆふりか

京

秋るほと秋るさるさるい

駿六

書を讀みて其意を解く山陰

月居

あううの記く又山陰

駒六

神楽や阿のををす其の上

分玉屑

しるを結人衣や其の上

駒六

さうこれの座より其の上

イモ花散

裏町や其の上をぬかす

駒六

白菊ををす浦の岸や

略三葛三

そのうはや其の上を

駒六

はてと其の上をい

子左琴

あううと雪の白梅咲き

駒六

松あれは其の上を

冬六武陵

横町と人をう

駒六

見るその中より

越竹老

其の松を其の上を

駒六

むする其の上を

方壺伯

其の上を

駒六

月を其の上を

京双南

とあううと

駒六

計の事や

方素篠

鹿鳴や

駒六

きとと人

方関豊

人の事の本

駒六

夕鳥や雲つゝぬ花のうつろひ
きのおやと今朝も朝鳥啼きなり
雨の日ハ晴も柳もねむりなり
犬の寐る形さへ枕ハ衣なり
二声とかきりある床の衣じ
ほくきくおきききききき
月影や仕事は寝る夢山
浮き又月くくくの水川
生くの大根は冬の日影外
月影子衣つるすや竹の突
なみち又子くりの心きくぬきなり

石毛

駒六

宇宙

駒六

越竹里

駒六

手蕉雨

駒六

春臺

駒六

京空阿

あき雪のうら毛は漏れ湖の雪
木かきくやとつるけ富士の雪
富士の山花や春はあつる
蛙鳴けくけくけくけのぬ
廣波や丸うなりたる海の水
梅咲や春は雪の落る
ぬきや白いつきと合ふ梅と楳
雪の木や地はも入るき後の雪
ゆふ雪やおもくと雪の後の雪
きくけくけく山をばあき雪の雪
きくけくけくけくけくけく
きくけくけくけくけくけく

駒六

京春坡

駒六

七呂兆

駒六

京芦涯

駒六

雄淵

駒六

歩雲帶

駒六

蝶のりへ人もちきく尺ゆき

如毛

蝶のりへ人もちきくすく月面

京月峯

誰ちらう山の井歌く春の面

駿六

糸先よき梅よきのふ蒼うち

笋春蟻

梅うさやとく神く雨う降

駿六

正月や火桶抱くう花の最

駿六

四重の松よきえく演書

駿六

昔は住ハ鳴の湖邊を月の秋

毛乳阜

夕月の水の中やそ若葉うか

駿六

月丸くお香丸くぬむりり

鴨一羽横はきねりる月の月

駿六

夏の来はあも星す山のうへ

眉山

怪子や風よそふ家舟の上

碧乙二

舟中うゝ旅人りや夏の月

駿六

青梅はゆふけ音の音鳴り

トコ對竹

時を南はなうはの音鳴り

越島

起りて松は鼻する男廉汁

駿六

山ふたうゝと出りるふの月

台花陶

小ふしてニはありぬうこつふり

大坂春人

月玉因横理ハヤの風

駿六

良平

父角

張りや炭火のほたる松の風

騏六

玉照や木うろくふむ松の松

推已

青柳の宇下松よりなりぬき

筍の露もこりぬきほひる方

騏六

木の枝やふ小提てり豆鼓茶砂

堺茂良

たぬすぬ肩よりなりぬきのうろく

京雪雄

初丁を一粒は配れ伊勢尾張

騏六

思はすの水の瓢をやりうろく

栗兆

飯初の水のあやえ松の露

騏六

炭俵へえい圓出るきよほひり

みかんの露を松よりうろく

あゝぬくなくすすあゝぬく

あゝぬくありとハ

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

梅笠

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

あゝぬく松の露のよきあゝぬく

菩薩戒童蒙談抄

廣く國の法度は狭く家は挺あり守らば一々
かゝぬ道とて神の通す聖人の法も各々をかれお
ぎやうに定まること先代佛の方て戒といふそれと
種ぐまゝくもれどもおぼろげに河へさるる菩薩戒とい
その名目のもまじらうがに中々重き戒をもて導き
聖賢律師平修名ふやうにて海切は河へられぬ
是よりいひける此國法世の法もさむべうてなづ
余の通るるもいひやうとていふべき物なり

果老香序

今わが海をうごめろよとてぬたの
つらより往來する里のかへさよ
おもむきおろし吾妻より
終法書人志げとある様お誂法
友を南詔のつゝの詔は存るなり
乙周ありありと一筆を無へ枝を
すゝすゝまんやなりけりよとある

の并けのうねよとすやありあり

まら雁は秋ふ月のさやぐに
井をたぬ枯も晴をこころん
いりよ野の草をみりうき
ハ重荷橋を揺りのかこみ
のそけを望みうつね人 秋
ゆふ草をみこきり花を
田わうをくち中はきり
免つらうやせねの様の面
ねる小藪はもうむし
きぬをきねも准はる

大阜 大巢 梅間 すみ 国水 鹿野 黄山 九峯 梁臺 更着

北来

誰ひより野舟は笛を吹も秋
いふもあはれの涙を
白雲栗の風も見はゆる秋
あつらふ雲の舞を
豆腐もちかく海を
我もうらはれもつたの
月ありて雲をみるさ
とて手み雲をゆく家
世のものをうき名を
晴り進むる雲を
岩山の丸なるほ

東陽 沙鷗 月底 永完 青峨 谷卧 津子 阿城 左雀 土道 湖風

吹

東宮名をとりたすむ院基の系
ぬきハはよさうそ東宮名
うんこ名をけハはつく庵
多武雄名勸修寺名多武雄
閑宮名さうそ重ハをう
竹内のはりて落てかんこ名
かむこ名森のこ名ハ月夜
佛も耳ハをとり東宮鳥
東宮鳥鳴や東宮寺の堂のこ
人の名を同ハ名うんこ名
あやしてさうそ東宮の系名

砂牛
柯毛
更著
圃曉
大阜
野高
素月
野秀
蘇下
湖風
嵐峯

系の戸やおせとたけと東宮名
お月ぬやうこさうそ東宮鳥
東宮名こさハをうか東宮名
東宮名をうこさハをう東宮名
可武庫名をうこさハをう東宮名
多武雄名をうこさハをう東宮名
東宮名をうこさハをう東宮名
加武湖名をうこさハをう東宮名
月夜名をうこさハをう東宮名
住つけハをうこさハをう東宮名
山樞子ハ日名をうこさハをう東宮名

大蘇
五道
躬貫
犬阿
駄六
彫蕪
昨来
武三
珉上
意逸
秋国

あむこゝろきこしきときほろけ
今も花むくきり山崎のうんこ
屋す寺の壁のあうさふあな
あなをうやきふふあな
あなをうやきふふあな
うんことりきこしきときほろけ
あなをうやきふふあな
りやうきふふあな
うんことりきこしきときほろけ
あなをうやきふふあな
ものいけぬあなをうやきふふあな
あなをうやきふふあな

青峨

葛井

免洲

暁き

すこ

国水

可玄

佳雄

浦且

左雀

有磯

枕七歌四下七七

あなをうやきふふあな
うんことりきこしきときほろけ
あなをうやきふふあな
りやうきふふあな
うんことりきこしきときほろけ
あなをうやきふふあな
ものいけぬあなをうやきふふあな
あなをうやきふふあな

多四

月底

一草

駒六

栗大

都水

柏亭

墨樵

吐山

二虹

揚洲

麦うゝの笛は付たり末古名
 ゆきこ祭ハヒきりよ鳴る末古名
 吹起ゆきまけハ鳴るより雷音
 鳴より先入飛なりつ末古名
 なきうゝハ吹起るゝとくんこ名
 昔張とよけハ何んつ末古名
 一々ぬうき雪あなつ末古名
 飛ふことも菊ふて居たりんこ名
 果古名なくや縄あふ葉果一把
 加せこやうりるも踏登初を名
 いづきのとゝゝ面を何と名をのこ

沙陽

谷卧

桂五

三河
谷呂

日
卓池

日
翠川

日
推已

日
孔阜

東陽

少汝

枕七級四下廿八

いづ藩くぬみやひわつふはま
 名古屋まいつづきの末よりも延び
 雪をいさゞとさすけ地他階のや
 ちやほのその乙周くをばせくせあ
 其みやひの因縁をく免とふすも
 淋
 首す一の垂みもこふよつ末古名
 雪のちりよあをひもけは末古名
 うんこ雪阿免ハ降長く晴やは
 炊をそやく雪もさやふり末古名
 末古名大井必殺のいほりうゝ

近
西溪

日
ちう

大巢

珉屋

雨節

寺町ハ靡もさへ可んあ　香
蟬丸の彦をゆへにふ来古香
かきこゝるなくやあこびるの面
香はふ舞ん月も今宵の来古香
あのかまは葉葉がに斬りんこ香
関古香余の香う来く連るり
りんこ香舞おてもやうりり
大名の杉はうりり　来古香
常しくもふふりり　かきこゝる
常木のかきこゝる　来古香
あゝ雲を袖はたけ目うりんこ香

八峯

永宗

菊居

里相

金谷

蕉雨

雀差

徐艾

何頼

三替

壺伯

批七款四下廿九

取わゝゝのこま啼きり来古香
りんこ香あのかきこゝるの来りり
乙因丸―たか松のこま
東武の巢兆う方より送る
あわり丹きんれを
来古香りりや群日十六日
乙因を引導る
来古の仏のうけよ来古香

雁亭

蒼根

巢兆

まき

来古―地元の山々の青　櫟

乙因

常のものをね〜も姿うか
たるゑの門のそきり葉雲の
蝶を飛や渉るのうね耳又つゝ
陽をやみ移けに這ふてをる
を運翹ややある一の巾細に
比奈道の柳を色々と華なり
ちる也やこそをゆくをる豆の下

夏

常ををの山ををを浅なく
一風情わりや扇のうさやう
うの森や已う四月と咲けけ

保土浪やもぬうと利やまの房
松風は引移るり松魚うか
鳴の葉の風流さぬよ々々ぬ
雄の音やあううき弟ちる

秋

耳たふは枯の初風うすをり
枝もすき枝をふくや秋の風
萩のそ風もたよりか咲ぬら
ちつ丁やされは萩吹このやう
花たりぬまはらさとも是とあ
白川の雲ぬくさあ相撲うれ

大津路の鬼もさるるも秋の空
牡丹花の中よりわらうる花の

冬

松の葉や飯初より降るれ
しるしなり阿やま葉家の二ツ
ちりりりと木の葉が降目をあそぶ
風のあやしきもふゆやうりか
東千代とや勝手の尺やも蟹の壳
道中へ影さるる里の櫓火りか
袖あやいしけきききの久使
そつけと中く焼く雪の　店

枕七歌四下千

さるるふきふき集のあや
どりりかい課あやるあやる
角そねもひけりる家

書やえんそあもるる閑古　鳥

魯堂

文化四丁卯六月

岳輅揖

繪本今川

今川氏といふ所のいふ俊が息仲秋に授けたる書な
しつゝあるも思童の目よりてみ近きものなりと
た文章のやうにむけてはみよこの有るのやうに
うひぬはまはいでもむきしつゝ俄に室の持命とや
べきまやうにうきつゝ方ゆきをきつゝむきき
導人とも画どく平がふ秋にむきき世の人を
くみけて板成せし思童なりとやけぬと
やうなる方ゆきはみよ調へぬと

名をいふ事と影に多し亡人
相兄のひききりし撰むおけり
きききりしとく木犀屋を
傍ふ日者子竹丸いふ子ハ
素父の莫逆の友なりあるきを
次ぐまよのやをよとくふふそ
有雪しゝ木樹の翁さうく
信るにあきききも其きつる
衣うりてあききをきき

たすひぬ

久化六已秋

春々卓池記

并

振

桃七教四下冊三

つゝ金張鼻をくらや富士の山
五日乃風より十日乃西
程ゆふ月ををこれと巻あそ
あやまの氷を流しとるる風く
琴持はん静と茶ぬらん
今そそきたる静よりあや
まの風々ふるまへ流くそ
喉り眉よりる梅う香
小萩はむ那をよふ門の足あこ

岳祐

松兄

士朗

輅

兄

朗

輅

兄

朗

ともうくおも 漣のうひき
 有てなき事をとてそはな
 目ふうりてを 残す 雪掃
 吉ひらね 紀く見ふに 拾得
 阿け田の幣をなとふ 早 湊
 ハナナリとて 夜をかく なる
 まるる 啼き 雛子 小鳥を新
 なつ 花の 深ふ 曇を 煙らん
 歌 草の 口を あける 夕ぐれ
 常田 蝶 あゝこの 常田 又あきて
 二重のきぬみ 津む 張 笠

松りぬの葉のまきふを折るといふ
 麻ふすころの大百合を　　賣
 西百多寺にうてゝ　　佛ノ達
 温泉のなふふふ　　移りてある
 山駕の藤のそこのぬけなき　　曙は
 面存のまゐのま　　麻なりなり
 其むう　　海人も　　彼をひうう
 出をう　　神の　　と　　と　　と　　ハ　　誰
 秋風の月　　以　　起す　　ま　　海　　う　　ら
 今宵ハ　　麻　　ふ　　す　　と　　う　　て　　接　　見
 種つ　　と　　中　　の　　破　　岩　　の　　明日ハ　　なき

朗　　兄　　朗　　兄　　朗　　兄　　朗　　兄　　朗

采極震極をあらふ 星人
川、さふもむいせを引きて
鏡は雲の身をうらけし雲
あふ雲の花をきけの影を
念負ねる出るきりき

朗 兄 祐 朗 兄

月と日のるふはりふその山
雪の白いは晴る秋の 夜
夢松板屋を唐の窓すて
袴をふりふりすりふり
西人持持きのふけける牛の声
竹の葉葉のそきむる
うそははるふりふりふり
朝を西はるふり水うそ
菊うそはの浮橋をふりふり

士朗 岳祐 松兄 朗 祐 兄 朗 祐 兄

東の肥後の水車一木
 念仏又拍子、波にありて也
 うちは鶴の、御旅の二家
 里大の雲花、此の日の
 芒、露とあり、わがうは
 年輩の酒は白髪の色を
 思ふなり、わが身をひき
 寄るもの、世をくぐり、浪
 流しはけらし、世の影
 光もよみ、小倉の桂、進歩り
 玉ちや、向のあら、日の西

觀七款目下年方

百姓の鼻を二丁切せり
鳴きあはせ置のる
穴次西院家多
林のては梅を
腰うたのやうな重宝を
筆をのりしや
水金目も筆を置た
家来たるお舟の浦浪
お舟なる船は江紀行を
橋のたもとをみる川
日の影を好代に

神のあらは長そりくし
 早ふちニッたらくも花のな
 解懐おち子母 極る草 為
 みちく月澄けける雪の水
 佐よりひてそ 傍寐すくも

兄 務 朗 兄 務

枕七歌四十五

およふあとの雪まきえたり 丕の山
 艶嬌くある 沙るくくは事く
 涉面くともそるやうう梅の花
 む月ハワの雪くくの 月
 離の葉くふくふ目ハ野に
 加こは揺るく歩り 腰くけ
 松風ハあゝ住りく吹やらん
 くらふくくと育つくる 枝子
 崎神の屋く雪をねえつけ

松 兄 務 朗 兄 務 朗 兄 務

清先母の歳むけあり
夢むらばねたる夢を語る
無の夢する胡蝶の花
雲のひるを影の蝶むけ
水より流す新め山
遊く上りて基なる飯の泡
極むわゆる奇の糸方
不才と云ふ事一たる夢
望と面を何に夢の日
當り水すむむわけ
へをなせし一腹をぬく

兄 朗 移 朗 兄 移 朗 兄 移 朗

にこそ津波見の並市と夢
棟の汐方をい極草
餘城、眠る夢あつた
月、出ると流るる
きく一は夢又夢時基す三
茶の本の上、夢夢とあり
夢の夢をいふ夢は
志如きの夢をいふ夢
鳥め、底の極を端
時と井田の夢の
夢より大夢をいふ夢

兄 移 朗 兄 移 朗 兄 移 朗 兄 移 朗

牛車一たる味をくゑる
笑ふをくゑる嵐のけこ賣
平世をくゑる山吹りほく
塗茶の膳をくゑる花曇
袴もなきぬ蝶々の 見

朗 兄 朗 格

いひやの一節よりよよとのもほ
月と花とをくゑるよりくゑるおまが
月花の束はむつやき風接が
者およと人の接たる 横が
このいとぬ花又おまがく小言が
との花枝あるもくゑるおまが
輪くよりや横もひつゝくゑる
横さくや糸くゑる 壁の穴
袴もなきぬ蝶々の横

牛枝 雄洲 波乃 松兄 長少 公彦 椿堂 玉屑

小供等り一むろに梅の花
を一つき花でもあてうめの花
門ちうくも梅の花
中馬ふは梅の花
船鳥やふく屋敷の取尾
あさくられをふく母のり
朝鳥ふく親のうくき雀
松ひすく子の花見くまふり
小庭の草をまふ白の殿うけ
葵の葉とあつけく
ちいさうありけくをやうふ

小海
井
松元
、
茂良
巢居
松兄
加女

いやはや、大きうなりな
もあひつたよさき
たすす、あつたよハ
は、あつたよハ
ね、あつたよハ

いさ、あつたよハ
うく、あつたよハ
うく、あつたよハ

さう、あつたよハ
花ハ、あつたよハ
二、あつたよハ

年の上る方々をうき

あやうりよまたたきよ花よよと受
このつすむするほどよありむる
月花のなかりこのや池の舟
ちよのちも世はよくおれす花の陰
花さうりそ花々ぬる人の花
大廊吉よ金華ハもくぬ山梅
ともくくもうきよ花よまうは
花は阿ふぬるのちをうき
さうくくくくくくくくくく
牛梅は花風志める草蒲は

松凡

米彦

無溪

岱呂

旭亭

松翁

魯陰

百堂

訪隠志

任くくくを夕良の花のつ

鹿野

伊賀のふは住る僧のききよ
一食のたくりなくのあ非時
歩りききききききききき
そすききききききききき
つふいきききききききき
目ハ何をたきききききき
ふハききききききききき
きききききききききき
あききききききききき

方此のやうなるもの只口をきき
 母を志し乳房をわき
 せし出る時ちんそ志ひて
 食物をいふんやわたり

セの世なりや

口明きうをせハ厚紙をよき
 色とんせハふろし山さへ
 うるさを愚癡ハ一たり山様
 旅のもの十日もつハ運さるる
 夕多や実入ぬものううよ
 書を踏く葉はやとく山は

松兄 震巴 吐火 羅城 石毛 月居

世系圖

白々のちやや胡蝶の一草垣
 まむらやふもひらふ花のさ
 佛生きて十日もたれぐの花
 菜の花やさうらうらや雪鳥
 きのものかきなり六時丸
 ちまきな菜の葉の中や梅の花
 梅咲く才のまうを忘る
 葉の水のふぬ浮世や雪めの花
 氷玉の溜るあそびや花の葉
 ちく山ハ何れ降やう運さう
 花のすれ

鳥翠 頤亭 松兄 六書 珉上 松兄 汝榮 來杞 天老

腰の痛き事、此の如く

一の世行、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

漫

草

墨

外

六

女

松

兄

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

腰の痛き事、此の如く

月花ふつゝに揺ふ鳥が
花のよふをとりえれのわづら山
草の花や枝よけゝる枝の面
枯屋花多魂のそつゝき

亀梁
金石
駿六

常の字は入替うま垣ぬか
うらひす小橋多き小里うれ
常の少種つらん心ふらん
う久ひ寸の月おとらん組納
鳥の常をとりえとほをあら
燕来て現けをうける草鞋が

宇洋
葛三
吾友
松菊
了国
弘阜

地七級四下四

子雀の人ふあつゝをあら

大阜

あつゝすくをきくをあらへあ
あれ毒機りあハ世をう治山の
うこのこときけハよくあはへ
らる時も年々稀なり家
あられハ一ををきてあら
耳は新りてあらもあら
満つるあつゝあつゝあつゝ
あつゝの返事すゝせよ子規
あつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝ

松兄

雪帝

旅人ハ何リも是をやとくまに
 時多クハ湖水の月影代
 耶々きんは涙の境ハ人もつく
 じり分ハ纏ひしすくハ何れも
 雀等も事くハ思ふも 極る
 常ハ笛守よと極よ 鳴る 雀
 うくいすのちるも 花の小夢
 夢店や雲の云ッ流ひく川
 うくひすり糞するうこよ 解の上
 常の志も雨よ 何れも事
 終子の屋のなれりる也三筆

黄山 祖風 左雀 八千坊 三津 方明 馮月 野秀 日入 松兄

生駒ハ八月の月影代
 棟あけふのゆ合て啼き雀ハ
 事解くく腹ふくくく稲すめ
 ありきのうくすりより 夢の中
 かんこも豆ハ二毛ふありやう
 宋子もあふぬえくく 稲あり
 孫六もあふくく 稲あり
 事 松葉もあふくく 稲あり
 多 松葉のまきれり 鴨のま
 水多ハ鼻もひくく 鴨の海

翠川 五来 鞍風 其白 竹堂 松兄 五雄 卓池

元日ハうきうき二日ハ面々
道々この柳をきく竹馬
書新海人よりきてく

犬左
古猿
圃曉

人日

老ぬきハふひお喰ぬ新
元日や先うきき東山
苦き葉は苦むすおの月日
書柳をきくうきハ何小所
書をみおぐり猫の意
藪のや頬白頬赤の筆描て
書風や伊吹風よりきて

素梨
松兄
留国

批七款四下四六

この月日ハうきうき二日ハ面々
書新海人よりきてく
老ぬきハふひお喰ぬ新
元日や先うきき東山
苦き葉は苦むすおの月日
書柳をきくうきハ何小所
書をみおぐり猫の意
藪のや頬白頬赤の筆描て
書風や伊吹風よりきて

吐山
巢北
松兄
太節
一之
尺女
其映
久角
此

種もくを種をくもうれしき
人の痛やうと思ふおもあま
永き日の山をくくして隅田川
りきききききききききき
餅もききききききききき
光せにを溜さくものをきき
鳥もききききききききき

四葉納涼

くきききききききききき
きききききききききき
きききききききききき
きききききききききき

花叔 冥々 玉之 珉屋 松兄 河洲 世竹 硯静

旅人ハ萩芒より衣きり
萩のきき風の中より衣きり
きききききききききき
掃ききききききききき
等帯木の花ききききき
お秋もききききききき
きききききききききき
きききききききききき
きききききききききき
きききききききききき
きききききききききき

田未 有磯 五寅 葵亭 松兄 可都里 柳莊 曉甫

丁卯七月既月梅花園の妻
みをむく其歡をいふく
みえとハ本坊の士郎白首の
つゆ城一の井の桂五席足の岳格
花癖のヤ 汝なり 強うつる
人ハ鹿野 天を 葛井 大蘓 五道
五雄の徒なり かの日の交還ハ
浪田の早稲のいよゝ 層も 喰
さるを 唐多 崎の折のなり 月
淡ひ不二の雲ト 一の花のこゝ
あゝとて 華の 花を 清浄 一

渾てあきをつゝむ 酒ハ伊丹の
白茅 花の海の小海花を蓬萊
鴛の蓬よのせとをゆきれらる 五老の
翁 終日の宴ハををす 園中の
月ハ 戯れと玉母 枕ハ 疎るる 此
あゝ 面水の 花の 花ひや
字をとく 木犀 居 李兄 記之
年よりハ 皆 李兄よ玉す 月
七夕ハ 芙蓉 花の 夜なり ぐり
七夕や けとよう 並ふ 李の 花
終ハ 三日もあきハ 花の 花

夏の来はあつてもおろけ山の
 をそつ常々あつてとけはやの
 川よのそははくすありき葉摘
 葉の葉葉何ほくもなや雪ゆ
 すつすつとあつてすつすつと
 如月や寺をみるすつと葉の
 もやうのほはすまなり涅槃像
 あつたやつた子たの砂の中
 うけろやねをてはる貝の口
 まぬやうに足る金華の
 勢田の櫓うけうをりえ

眉山
 介亭
 祥禾
 奇淵
 松兄
 蕉雨
 東陽
 梅間

松兄

櫓をほす櫓もなむ櫓外
 櫓はの沈のまゝ
 うろむく宮ま飛くむる
 お天まもすて福まの自ま
 葉柄もろくむくむく山の家
 まるまのまをま猫のり方
 夕まもすまもあま飯家
 まるまのまもねハ木の風
 まるまのまもむけり牛の角
 桐大桶一木葉ののり方
 小隅く降出すまのまのま

松兄
 梅夫
 李東
 李臺
 周瑞
 桐栖
 有斐
 芳之

人言のうらひ時や冬にもり
仏は三節たるぬき跡くき
をともちあきしりやぬれ跡や
祖父の白髪光りて冬の面
をひうりたるや湖氷のその入
ねつる底もたえと雪の朝
田舎くくさりとて雪の跡を
古銭子名を小粒とすふり
まはちとくそ跡の跡なるる
蟬を舞やを新一把もつふたけ
川をこよふは子持り凡中

秋葉 砂文 松兄 稻淵 榮也 推已 朱良 左琴

位の江の春は派をき解き
金谷をききききききき
旅三日ハナリナ五日あり

布舟

兄はききききききききき
雄々の極すき山家計

松兄

我妻其はききききききき
首をききききききききき
ゆききききききききき

旅人の星のくきききききき

雲をききききききききき

ちききききききききき

所中の山ももたれと涼うか
 清水よりよあ何とて雲の青
 夕立の社をいつと板うか
 中ふふちや煙火提くをなれに
 形をいつと轆をよるうたひそ
 月よ麻秋よ不足のあらハを
 弟のものを事ぬ目やなめきり
 親よるを月よ月よ唱あり
 中ふふちやてきのふハ非や
 とたよ雲より紀州ハ月花よ
 中ふふちをいつとされとる

富岡 冥叟 武陵 浦旦 山人 光喬 九岳

批七初四下上

中ふふちやてきのふハ非や
 とたよ雲より紀州ハ月花よ
 中ふふちをいつとされとる
 中ふふちやてきのふハ非や
 とたよ雲より紀州ハ月花よ
 中ふふちをいつとされとる
 中ふふちやてきのふハ非や
 とたよ雲より紀州ハ月花よ
 中ふふちをいつとされとる

松兄

精良

不二の山 なる恒不棄ま——て
雲ハふり——いそれたる世

そよき

年白——巨府も白——不二の山
露ハ露ハ亀ハ風よふ——の山
煉擇て仕白ハも——の山あか
大仏の鼻——う——出——り煉——ち——ひ

緑外園餘千秋の賀延て招て
年も名も凍——く——い——ひ——ひ——ひ

名月ハ——い——う——う——空も月事や

桂五

松兄

松兄

葛井

少法

〔批七終四下連三〕

松高を食ふをあ——秋の月

うふ——い——月ハ沸き——い——う——南

い——う——の面——い——あり——い——の月

山松の古き——い——い——い——の月

垣あ——い——い——い——の月

ま——い——月本——い——い——の月

い——い——月馬——い——い——の月

月——い——い——月家——い——い——の月

櫻の葉——い——い——い——の月

とう——い——い——い——の月

四ッ——い——い——い——の月

空阿

節梅

松兄

緩貢

鬼介

松兄

一州

一左

臥央

壺泊

松兄

あはれとや眉よあはれとや月
松の葉をふりてはしより後の月
春の月つ田の庵をくもり也
晴るはちてくもれぬの月
思ふとくもれぬの月
戸にうつらるる浪花をくもるの月
灘の水をくもれぬの月
月子一ふ尺の光のへてくもるの月
春のけの浪をくもれぬの月
桑の花のひかりをくもれぬの月
月をくもれぬの月

文曉
其成
于當
湖風
渡藻
蒼虬
五道
双南
儲央
かろ女
大商

山をふりてはしより後の月
何ゆゑはしよりをくもるの月
春の月つ田の庵をくもるの月
松の葉をふりてはしより後の月
思ふとくもれぬの月
戸にうつらるる浪花をくもるの月
灘の水をくもれぬの月
月子一ふ尺の光のへてくもるの月
春のけの浪をくもれぬの月
桑の花のひかりをくもれぬの月
月をくもれぬの月

何ゆ
畦間
松兄
岳輅
樗堂

あらけりきい 雲は縹緲 然るけり
 空のまの 雲の煙を 位
 雲の海をうき人を恨み
 五月の山は洗ふ けり
 龍吟 牛の柱の けり
 苔のむ けり 石をつり けり
 梅の花 赤い けり
 雲の月夜の あれ けり
 鴨う けり 雲田の 町 けり
 雲は 雲を うき けり
 雲の うき けり 具足のおき けり

朗 兄 池 雄 雨 采 朗 兄 池 雄

人立ちの いそ 湯 花の 歌
 おう けり 雲を うき けり
 雲の 海を うき けり
 山は 秋の 雲を うき けり
 いそ けり 雲を うき けり
 朗 兄の 門下 雲を うき けり
 誰か けり 雲を うき けり
 雲の 海を うき けり
 松さひ けり 雲を うき けり
 下 けり 雲を うき けり
 日 けり 雲を うき けり

朗 采 雨 采 朗 兄 池 雄 雨 采 朗 兄 池 雄

あつらゐるに言えやれハ水の原き
まきものなるまき柳より
まき花うさけハ鳥も蝶より
まき又希ふうけうふの店

兄 龍 池 雄

文化六年

己春三月

批七於四事七

俳諧五七集

枇杷園士朗先生著

全五冊

枇杷園先生ハ一世の雅英

雄名海内

生涯の俳諧教

に於て多量の研文ハ凡流新奇なれ

数篇と

るび三十部をつらひてあつて五七集と

是

生涯の俳諧ハ

たゞ事ある善

英

の流をくみ入らば論他阿の人にも

ま

をうさけハ鳥も蝶より

その

群英の句をひらく識は

前篇三篇續篇拾遺

半掃菴也せんそうあん有翁ハやうおう徳替好事とくかいいの料りょう々々くわい俳諧はいかい中ちゆうの
 俳諧者はいかいしや如ごとくも余待哥よまちか文書ぶんしよ々々くわいひ
 群ぐん出でざる事ハ世よの人ひとのくあはる所ところ也なりとけてい
 今いまもあゝぬちも柱文ちゆうぶんハ如ごとく一家いっかの晒さらぬ
 奇き妙めう々々くわい句中じゆうちゆうハ如ごとく事こと物ものハ文意ぶんい々々くわいセ
 お篇へんハ既すでに是年しぜん々々くわい世よは如ごとく人ひとの如ごとく
 後ご賢けん拾遺しやくい々々くわいてます純世じゆんせいの素もと々々くわい文ぶん々々くわいん
 ちる人ひとハ書しよ々々くわいの轍ちやく々々くわいハ又また戯文げぶんの
 佳けい文ぶんを以もつてきこの如ごとく

大全早字節用集

節菊の如く世に幾板ありて其は室をたぐひ又
あつていせうも物ある一々の救ふる早にても
中へかの秋の二つとんとみよはさびしき筆癢のうち
何れかんと迷ひ又雪といふまどさぐりて悔とあるをえん
是なりと元ちづ椿と津液障と月水とを引あやまる
あきにあらびとて用ひさまを救ふのみをうてひくぬけ
今に節菊天地人木竹本言候がごとく日をけむをうばふ
ひくを是より得やく時よく増字をうたれば敬は双節菊

筑紫紀行

全十冊

我屋府下の雲原平七翁とて、是は財公業の心誠
いひて後年よりて、松山敷水をもて樂にせられしと
中もして、西國は松山敷水をもて、長崎仕方の紀行と云は
れし、すべし文政より、松山敷水は、松山敷水の事、事のす
き、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
人のあき、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
名取古記、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
は、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の

諸方を、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
さんとの企、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
わ、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
友、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
亡人の教、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
諸、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
わ、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
わ、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
わ、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の
わ、いひて、松山敷水の事、事のすき、いひて、松山敷水の

晴雨考

年々出版

此書八年内の晴雨風雲を考へ五運六氣の理と
 天地の機密をいひて年々
 出版せしむるありて
 寒暖の順不順時候の正不正を豫知する物なり
 家好むるに依りて
 護方のことにつきて
 多や少やの次第を
 實に居家必用の書なり

枇杷園士朗七部集初編

飲中八仙 宮中が泰山 著は眼
 麻かり 口内 為る懐紙

同

二編

柳日記 文化九年仙 於本寺 書後
 花日記 蝶之日記 萬梅苑

同

三編

松の炭 琵琶寮 寺の硯 萬石に
 二日月 各々一名 本紙つー

同

四編

法法集 萬乃々々 本とくし
 著は太 著は太 著は太 著は太

同

五編

長寿丸 柳柳々 本とくし
 著は太 著は太 著は太 著は太

同

隨

筆

先生一世の陸葉
 古今あり 著は太 著は太

同 崔芝集

朱樹翁東方記なり詠ふ
よて同板せしをあつむ

同 發句集

先生一世の名句集あり先
初學の爲ふせし書なり

同 後篇

同前篇よりなす後あり
めし書なり

同 類題發句集

發句集よりなす後集なり時
雜よりなす見安しむ

東都日本橋
新右衛門

前川六左衛門

尾陽名古屋
本町七丁目

永樂屋東四郎

蘭藥鏡原

全部五卷

内草之部三卷出来

此書ハ源名

「獨魯傑列印」ト云フ

和蘭本草集成ノ書

ヲ譯スル所ニ

金石草木鳥獸

昆蟲及ヒ造釀等ノ類ニ至ルデ

一ツモ残ス所ナク

一品ヲニ

和漢ノ名ヲ記シ其性ノ溫涼能毒ヲ辨シ其外

彼邦ニ製煉ノ術

ニヨリテ

藥精ヲ取り露氷ヲ製シ膏油酒醋

等ヲ製造スルコト

ニ至ルマデオヨソ藥物ニアヅカルノハ微細ニ

コレヲ論シ精密

ニコレヲ辨セル所ナリコレモヨリ醫家ノ

至寶ノミニアラス凡博物ノ諸君子ノ萬邦ノ名物ヲ搜索

研究スル必用ノ珍書ナリ

尾張

東壁堂主人謹識

